

---

# Aster

綾里 美琴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Aster

### 【Nコード】

N2502Z

### 【作者名】

綾里 美琴

### 【あらすじ】

マンホールから落ちたらそこは異世界でした。夢なら今すぐ覚めてください。帰る方法は神様の感情を取り戻す事？ 無茶すぎませんか。 平凡代表少年と、恐ろしく綺麗な女の子（ただし無表情）の二人が一緒に過ごした日々。\*サイトからの転載、全四話

## いち

自分の人生なんて、至って平凡なものだと思う。

ただ毎日なんとなく流されるように生きて、友達と馬鹿やって笑い合って、時々将来について真剣に悩んでみたりもして。そうして落ち込んだりもするけど、時間さえ経てばまた笑う。特別生きることに執着してるわけでもなく、焦ってるわけでもない。それを虚しいと感じたりはしなかったし、充分幸せだった。平凡の何が悪いっていうんだ、変化が訪れないってのは恵まれてる証拠じゃないか。そんな日々がこれから先も続くのだと、何の根拠もなしに信じてたんだ。

まさか変わる時が来るなんて知りもせず、いつも通り友達と別れて。その「いつも通り」を後悔する羽目になるなんて、一体誰が予想出来ただろう。

「ここは、どこなんだろうか……」

もう見慣れた曲がり角で、友達と別れる。友達は右へ、俺は左へ。家に帰ってから宿題終わんねえよ、なんて阿呆なことをメールし合っつて、本当に終わらなかつたら次の日必死に頼んで写させてもらったり、その代わりにジュース奢ったり。そのせいで財布事情が厳しくなる時もあったけど、そんな時はうまい棒だとか安いものに変えてくれた。それが、俺の日常。今日だってそう大差はなかったはずだ。それなのにどうして辿り着くのが家じゃないのか、さっぱり分からない。

「どこなんだ、ここ……っ！……」

いくら叫んだところで、この広い空間ではどこにも届かず消えていくだけだった。

「思い出せ、俺は家に帰ろうとしてたよな……？ で、工事中だったから仕方なく回り道しようとして、マンホールに落ちて……っつてよくそれで無事だったよな俺。いやいやそういうんじゃない、何で落ちた先がこんな奇想天外な場所なんだ？」

誰かが聞いていればただ寒いだけの一人突っ込みをして、ぐるりと周囲を見渡す。……森。の一言に尽きる。何このカオス。夢か？ 夢なのか？ そう思っつて、頬をつねるのは既にやった。それも二回も。もちろん、痛かった。

誰か、こんな俺に突っ込んでくれないかな。馬鹿じゃないのか、っつて笑い飛ばしてくれたっつていい。そうしたら俺は一人じゃないんだっつて安心出来るから。混乱する頭が生み出すのはそんな思考ばかりで、正解になんかこれっぽっちも近づかない。そのとき、俺は一つ  
の存在を思い出した。

「あ、そつだ、携帯……！！」

即座に人と繋がれる、素晴らしいものがあるじゃないか！ ナイス、俺！ でももう少し早く気付いてほしかった！

一分一秒でも惜しいと、慌ててポケットから取り出して画面を開く。これできつと、大丈夫だ。

「……………真つ黒……………？」

機種が真つ黒なわけではなくて。いや、真つ黒なんだけど。

間違いない昨日充電して、満タンにしてあったはずの携帯はうんと  
もすんとも言わない。おっかしーなー、まさか壊れた？ まだそん

なに使っていないはずなのに、使い方が荒かったんだらうか。

修学旅行の時に友達とノリで買ったストラップが一本つけられただけの、シンプルな携帯。重厚感のあるブラックが気に入って購入したものだ。指紋が付きやすいのだけが難点だけど。クラスの子とかは見るからに重そうで痛そうなデコレーションをしてたりしたけど、あれ使いにくいんだらうか。ストラップとは言いにくい大きさのぬいぐるみとか。携帯がメインなのかストラップがメインなのか疑いたくなる。女子の携帯ってすごいよなあ。なんて今考えてもどうしようもない話だ。とりあえず、ここはあの場所じゃないんだから。

気付けばまた脱線してる自分の思考を、一生懸命元に戻す。現実逃避したってどうにもならない。携帯が使えるようになるわけでもない。そのくらいは俺だってわかってた。……だってもう一回つねったほっぺ、やっぱり痛かったし。

「とりあえず、誰か探そう……。きっと帰り方、知ってるはず。うん」

そう自分に言い聞かせて、一步を踏み出す。俺だって本当は今にも泣き出しそうなくらい怖かったけど、ここで何もしないでいたらそれこそ帰れないんじゃないかという恐ろしさの方が勝った。だって、何も知らない地というのは恐怖の対象でしかない。修学旅行で一人だけ迷ったときとか、こんな気持ちなんだらうか。とてつもなく心細くて、次から次へと不安が湧いてきて、一緒にいた友達のありがたみを再確認してみたりして。ああ、無事帰れたらアイツらに連絡取ろう。

大丈夫。誰かに会えたらこんな世界は終わる。光のない、こんな世界は。

「……大体なんで、マンホールから落ちた先が薄暗い森なんだよ。おかしいだろ、普通におかしいだろ」

自分を慰める意味も含めて、ぶつぶつ文句を言いながら探索する。森、更にはジャングル。サファリパーク。木や花は好き勝手に至るところから生えてるし、動物は自由気ままに生活してるみたいだった。

全体的に暗い感じで、灯りも太陽の光もここにはない。見渡す限り同じような景色が続いてて、結構歩いたはずなのに変わる気配すら見せない。建物なんて、一度も見なかった。……もしや俺、入り込んでいけな場所に入り込んでたり？ 確か迷ったときって、その場所に留まっていなきゃいけないんだよな！？ でもそれって誰か助けてくれる人がいる場合だよなあ。……だめだ、考えててまた泣きそうになってきた。

俺はずっと都会に住んでて、周りにはほとんど緑なんてなかった。小さい頃よく遊んだ公園もぽつんとあるだけで、玩具だってほとんどなかったくらいだ。空に届きそうなまでに高いビル、とてもじゃないけど綺麗とは言えない空気に水。それが、今まで生活していた場所だったのに。

「……誰か、来た」

「ここに、ですか？」

「他にどこがある」

「それはそうですが……まさか、人間ですか」

「まだ分からぬ」

・  
・  
・

「フーかここは日本、なんだろうか……。まずい、それすら怪しくなってきた。何これファンタジー？　そもそも地球上に存在する場所なんだろうか」

道の真ん中を歩く俺（だつて端っこつてなんか出てきそうで怖かったんだ）を木の陰からちらちら見る、動物たち。最初は猫かー、猫かわいいよなあ、なんてのんきに考えてたけど、よく考えてみれば何でこんなところに猫がいるんだ。それも、猫なのに猫じゃない。猫つて翼生えたりするっけ……。いや、ありえないよな……。

鳥は羽が六枚あったり、明らかにサイズがでかかったり、牙が凄かったり、ゲームの世界を連想してしまうのは、俺が一時期モンハンにはまっていたせいではない、と思う。となるともしかして、スライムとかもいたりするんだろうか。あのなんとも言えない見た目が好きだったから、いるならちよつと見てみたいかも。青のスライム、赤のスライム、緑のスライム……。楽しそうだな、と考えて、そういえばここには色がないんだと気付いた。何で全部モノクロ調なんだ、気が滅入るじゃないか。

一体どれだけの時間、どれだけの距離を歩いたんだろう。進んでも進んでも変わらない景色に、いい加減俺も挫けそうだった。どうしたらいいのかという絶望がわずかに残る希望を打ち砕こうとしていたとき、ようやく今まで見ることのなかったものが視界に入った。

建物だ！　大喜びした俺は、最後の気力を振り絞って駆け出す。

けどそれが何なのかはつきり分かると、思わず足を止めてしまった。

「……神社？　だよ、な。たぶん」

神社　偉人・義士などの霊を神として祀った場所、だっけかな。昔辞書をばらばらとめくっていると、そう書いてたような記憶がある。携帯さえ使えればすぐに調べただけ。でも何で、フ

アンタジー世界にあるのが神社なんだろう。流れるに神殿とかじゃないんだろうか。ドラクエの転職だって神殿でやってたしさ。確かに、色がないと思ってた。色が欲しいと思ってた。けどこの場所にだけ存在する鮮やかな赤や他の色はあまりにも異様で、周りの景色からもひどく浮いているように見える。それなのに何故か、完成された一枚の構図のような、そんな感覚を覚えた。

それ以上近付くな。

ふと、誰かの声が聞こえた気がした。慌てて辺りを見渡すけど、どこにも人の影すらない。な、なんだっただんだけ今の。もし俺の幻聴じゃないなら相手には申し訳ないけど、その忠告は聞けない。誰でもいいから会いたいんだ。会って話が見たいんだ。一人じゃないんだって、安心させてほしかったんだ。

だから聞こえなかったフリをして、神社へと全力疾走する。近づけば近づくほど威圧感のようなものが肌に突き刺さったけど、息が切れて苦しかったけど、俺は必死だった。わらにもすがる思い、ってのはきつとこついうことを言うんだろう。一人は、もういやだった。

「……あの、すみません。どなたかいらっしやいませんか？」

ようやく辿り着いた俺は、数段ある階段を上り、息を整えながらふすまに手をかけ　　ようとしたら、勝手に開いた。

「何用じゃ」

ぞっとするくらい、無機質な声だった。思いがけず返ってきた言葉に、俺は息を呑む。

綺麗に切り揃えられた肩より短い漆黒の髪、日本特有の美しい着物。まるで人形がそのまま動いているかのような、整いすぎた顔立ち。人が持つはずの温かみが全く感じられない、冷え切った表情が恐ろしくて無意識のうちに一歩後ずさってしまふ。そんな俺を見ても、相手は視線を逸らさない。唯一色を持つ紫の瞳は、俺を捉えたままだ。

「何用だと聞いている」

彼方に飛びそうになっていた俺の意識を引き戻すのは、さつきと同じ声。そこにいたのは、俺と年もそう変わらないだろう女の子だった。

「えっと、あの、すみません。俺、迷子になつたみたいで……あの、ここってどこなんでしょうか」

「裏」

「へ？」

今、この子は何を言った？ 裏？ 裏つてなんの？ じゃあ表はいずこ？ そもそもこの子は何者？ そんな風に、俺の頭の中では疑問ばかりが飛び交う。よし、もう一回尋ねよう。俺がそう決意したとき、自分と彼女以外の第三者の声が先に響いた。

「先程からおぬしは誰に口を利いていると思つておる！ 人間風情が恐れ多いと知れ！」

「す、すみません！ ん、あれ、誰の声……？」

別に悪いことしてないのに反射的に謝つてしまふのは日本人の性だよな。悲しいかな、ノーと言えない日本人。

少女の声とは違う、というかこんな野太い声が少女のものであつて



もちや……つてやっぱこわいから！

「不運だったな、人間」

「はい……？」

不運？ なにが？ 喋るフクロウに会ったこと？ え、ひよつとして出会ったら命を取られる死神とかそういうのかなのか？ 実はラスボス？

そんな俺の考えを、フクロウ（推定）はあっさりぶち壊した。それも最悪の形で。

「今のおぬしに、自分の世界に戻る術はない」

もう本当、どれだけ笑われたっていいから、これは夢だと教えてく  
ださい誰か。

に

客観的に見ても、自分は普通の人間だと思う。というか、そうだ。勉強でも運動でも、特別秀でたものがあるわけじゃない。いつもほどほど程度で、良くて普通よりちょっと上くらい。でもそれでも別に困りはしなかったし、完璧超人のクラスメイトを見てたまに落ち込んだりはしたけど、基本的には満足してた。一等の宝くじに当たるだとか、そんな強運を持つのは一握りの人間であって、俺には到底縁のない話だ。当選した最高額、3000円だし。そんな普通の人間が、マンホールから落ちて次に目が覚めたらそこは異次元、なんて。あちこちで使い古されたネタを、一体誰が信じしてくれるっていうんだろう。

「え、あの、帰れない、って……」

頭が真っ白になる、っていうのを俺は初めて体験した。倒れなかっただけでも、自分を褒めてやりたいくらいだ。一体このフクロウ（推定）は何を、言っているんだろうか。

「ふん、理解出来ないのか。頭の悪い人間だな」

「いや、え……？ あの、ここって日本……というか地球じゃ、ないんですか」

どんな返答が返って来るのかは、俺だってある程度は予想してた。それでもわずかな期待を込めて、俺はフクロウ（推定）に尋ねる。ほんの少しの沈黙が、俺を追い詰める。ドキドキと心臓がうるさい。手にかいた汗が気持ち悪い。聞きたい、けど聞きたくない。希望が打ち碎かれるのが、恐怖で仕方がなかった。

「違う、と言えは違うな。だが、おぬしの世界に限りなく近いと言えは近い」

それは想像したどの答えでもなく、期待も不安も曖昧なままになってしまった。まさに、宙ぶらりんな状態。縋っていいのか、ダメなのか。それさえもはつきりしない。

そもそも彼 声からして多分オスだろうとこれまた推測だの言う俺の世界ってなんだ？ 日本、アメリカ、イタリア、フランス、ドイツ……ぱつと頭に浮かぶのは有名な国々。それらは地球という枠に収まっているはずだ。地球＝世界だとして、違うけど近いつてどういう意味だ……？ と色々考えてはみたけど、だめだ、さっぱり訳がわからない。そもそも俺あんま頭良くないんだって。平凡代表なんだって！ ああ誰か翻訳してくれないかな。切実に望むよ。

「えーっと、あの、やっぱりここは地球ではない、と……？」

おそろおそろ、口にする。すると、間髪入れずに返事があった。

「違うぞ」

「え、あ……ありがとう」

てつきりフクロウ（推定）が答えてくれるものだと思ってたのに、答えてくれたのはずっと黙ってた女の子の方だった。あれ、実は結構親切なんだろうか。第一印象だけで恐ろしいなんて思ってしまったて申し訳なかったかも。でも違う、って……なんだ、結局異世界なんじゃないか。分かれれば怖くな……って余計怖いから。

全部夢だったなら、どんなに楽だろう。目を覚ますだけでこの世界から帰れるのなら、どれほどそうしたいだろう。うるさく鳴る携帯

のアラームを止めて、母さんが作ってくれた朝ごはんを食べて、途中で妹が起きてきてきょつと会話して、ついでに新聞のテレビ欄をチェックして、友達と学校へ行つて……いつか夢を見たことさえ忘れて、そんな当たり前な日常をまた繰り返すんだ。

でも、これは夢じゃない。感じる胸の痛みも、ほっぺの痛みも、底知れぬ恐怖や絶望も、夢の一言で済ませられるはずがない。なかつた事になんて、出来るはずもない。手を伸ばせばすぐそこにあつたはずの何気ない日常が、急速に遠ざかっていく。まるでそっちが夢だったように霞んでいくなんて、信じたくない。ああどうして、本当にどうして。こんなことになつた？

俺、これからどうなるんだろう。どうしたら、いいんだろう。言いようのない不安に襲われて、その場にしゃがみこんでしまう。気力だけで立ち続けるのもいい加減限界だつた。

「そもそも何故、生きた人間がここに……。主、どうしましょうか」「知らぬ」

「はあ……まあ仕方ないですな。どうしようもない。という訳で人間、潔く諦める」

「へ！？ いや、無理ですよありえないでしょ！ 大体ここどこなんですか！ 帰れないって何で……！」

無理だから諦める、と言われて納得できるはずがない。そんな物分のいい人間がいるのなら俺は見てみたいよ！

ひとつ得た知識。

・女の子はフクロウ（もう面倒なので確定）の主。要するに女の子の方が偉いらしい。

・今知つたところで何の意味もない。

「ここは、裏だ」

「浦田さん……？」

隣の隣の隣の家が、浦田さんだった気がする。はて、それに何の意味が？ そうやって悩んでたら「阿呆か」と一蹴されてしまった。うう、厳しい。

「トランプに表と裏があるように、世界にもまた表と裏がある。二つは遠いように見えて近い。だが永遠に通じる事はない。そういう事だ」

「……俺のいた世界か、この世界のどっちかが裏だと……？」

「その通り。おぬしのいた世界を表とするなら、ここが裏に当たる。通常相容れる事はないが、二つの間には扉があるのだ。互いに行き来可能な扉が、な。おぬしはその扉を通して来てしまったんだろう。まあ、かなり特殊なケースだがな」

フクロウさんは多分、ちゃんと説明してくれようとしているんだろうと思う。それなのになんだろう、このぶつとび加減。筋が通っているように見えて、言ってる内容めちゃくちゃです。

扉ってのがつまり、俺の世界にあったマンホールなんだろう。で、俺はそこに落ちてしまった。だから裏の世界であるこの場所に来てしまった。うん、漫画とかでよくある展開だ。でもあれは大抵何かしらの理由がある。勇者召還だったりとか、そういうのだ。……じやあ俺は？

「あの、特殊なケースってのは……」

「表でははぐれてしまう者が、ここに来るのだ。例えば死者だったりな。おぬしの世界に妖怪やらいただろう。あれは裏の世界の者が誤って扉を通ってしまったケースだ」

「妖怪ってそれ一体いつの話ですか……。さっきから気になってた

んですけど、その言い方だとまるでそれが正しくないことのように  
すよね」

「実際、正しくないのだ。表から裏の世界へと来るのは正しい循環  
だが、裏から表へ行くのは正しくない循環。そして表の生きた人間  
が迷い込むのもまた、正しくない事。言い換えれば、決められたル  
ール以外全て正しくなどない」

表では生きられなくなった人間が、裏へ来る。けどそれ以外のこと  
で裏へ来るのはおかしい。そして、今回は俺がそのケース。……俺  
は、間違った存在だっということらしい。  
けどそれだと

「相容れないはずなのに、二つの世界の線引き、曖昧すぎないです  
か」

つまり俺の世界が地上で、ここが天界のようなものだと考えればい  
いわけだ。だって死者もここに来るっていうし。で、表に行くのは  
間違いらしいし。それなのに、話を聞く限りそれはどうも頻繁に起  
こっているものらしい。なんで？

だからただ不思議に思って聞いただけだったのに、どうしてかその  
場の空気が凍った。……え、もしかしてこれ、触れちゃいけない話  
題だった？

「……おぬしに言われなくとも、分かっている」

すみません、やっぱ聞きちゃいけなかったみたいです。フクロウさ  
んの声が更に低いです。とっても不機嫌みたいです。で、でもさ、  
俺だって聞く権利はあると思うんだ……！　なんて言えるような空  
気じゃない。ごめんなさい、マジで。

「正しく送られるべき者、誤って入り込んでしまった者を導く者がいる」

「え！？　じゃあ俺、帰れるんじゃない……！」

「それが出来るなら、おぬしに帰れないとは言わないだろうが。少しは頭を使え、若造め」

「す、すみません……」

俺、喋るフクロウに若造扱いされちゃったよ。もしかしてこれすごい貴重な体験？　いやそもそもこの世界にすることが特殊だって言うんだから、そこから貴重すぎる。でも、全然まったく何ひとつとして嬉しくない。それなら宝クジ当たりたいよ……

「それが可能なのは、それぞれの世界を管理する者のみ。おぬしがイメージしやすいように言い換えるなら、神というものだな。おぬしの目の前にいるこのお方の事だ」

「この方って、神って………ええええええ！？」

「失礼な態度を取るなど言っておるだろうが！」

まってまって、待ってくれ。俺何回驚けばいいんだろうか。後何回驚いたら開放される？

神、ってあれだよな……信じる人は心から信じる、目に見えない偉大な存在。ついでに俺はいたら面白いよなーくらいの認識。だって俺の生活には何の関係もないし。周りの人だってそんなもんだったけど、目の前にいるこのきつねーな女の子が、神様だって言う。いやそれ何の冗談？　ってことは待てよ、そもそも俺たちの世界にも神様がいてって………えええ。

「あの、これ壮大なドッキリとかじゃないですよ……？」

「この期に及んでまだ言うのか？」

「………そうですね、ああああもつ、俺どうしたら………」

帰る術がない。帰れない。その事実が、頭の中でひたすらエンドレスする。平凡な人生だったけど、やりたいことはそれなりにあったし、こんなところで終わるなんて信じたくなかった。取り戻せなくなって、初めて実感する。当たり前前の日常が、俺にとってどれだけ大事なものだっただのか。大切なものは失ったときに気付くって、本当なんだな。

……あれでも、フクロウさんが言ってることってなんか色々矛盾してないか？

「神様がいて、この女の子が神様。で、神様は別世界に送れる力を持つんですよね。じゃあなんで、出来ないって……？」

出来るっていったり、出来ないっていったり。結局、どっちなんだろうか。

……どうも、本日二度目の失言だったらしい。空気が怖い。沈黙が肌に突き刺さってかなり痛い。頼むから、何か喋ってくれ。ほんと頼むから。

「……主は今、その力を失っておるのだ」  
「は!?!」

いや確かに頼んだけど！ けどそついうのはいらない！

「正確には半減してある、だがな。よっておぬしのような大物は帰せない」

「じゃあ俺ってやつぱり……」  
「最初に説明しただろう、いい加減諦めたらどうだ」

ああ、視界が暗く暗くなっていく。お母さん、お父さん、妹、友達、

クラスメイト、先生、ご近所の皆さん、浦田さん……挙げればキリがない、自分がお世話になってきた沢山の人たち、ごめんなさい。どんなに想ってもどんなに願っても届かないけど、どうかお元気で母さん、母さんの料理好きだった。さじ加減がびっくりするほど適当で、よく味が濃かったり薄かったりしたけど、母さんの料理大好きだった。弁当も毎日作ってくれてありがとう。生んでくれてありがとう。

父さん、いつも母さんの尻に敷かれてた父さん。でも本当はかつこよくて、立派な人なんだってちゃんと知ってる。俺たちを養うために毎日働いてくれてありがとう。

些細なことで喧嘩ばかりした妹、俺はいい兄貴でいれたかな。本質的には仲のいい兄妹だったって、そう信じててもいいよな？ お前もそう思ってくれてたの、知ってる。すごい、嬉しかった。

ありがとうだとか、ごめんとか、大好きだとか。伝えきれないことが山ほどある。まさかこんな風に別れる日が来るなんて、想像もしてなかった。どうして俺、もっと素直になれなかったんだろう。

ずっとこらえていた涙が、止め処なく溢れてくる。ぽたりぽたりと畳を濡らしたけど、そんなことに構っていられない。俺、本当に帰れないのかな。帰りたい、皆がいるあの場所に帰りたい。未練が、ありすぎるんだ

「……人間というものは、本当に面倒だな」

「いまくらい、泣かせてください……」

優しくしてくれなくたっていい。慰めてくれなくたっていい。だからせめて、許して欲しい。

「希望が、全くないわけではないぞ」

「え!?!」

その言葉を聞いて、俺は勢いよく顔をあげる。きつと涙でぐちゃぐちゃでひどい顔になってただろうけど、そんな些細なことは気にも留めなかった。

フクロウさんは俺の目線に合わせてくれて、背後にはキラキラした神々しいオーラが見える。気のせいっていうのが気のせいなんだよ！ これぞまさに救世主！ さっきは怖いなんて思ってたごめん……！  
でもそんな彼が口にしたのは、相変わらず期待していいのかダメなのかよく分からない内容だった。

「主の感情さえ取り戻せれば、おぬしは帰れるかもしれない」  
宝くじの一等に当たるなんて、ほんの一握りの人のできごと。きつとそれよりも遥かに珍しい体験をしている俺は、果たして運が良いのか悪いのか。

分かったこと。

- ・女の子はフクロウの主。
- ・ここは裏の世界。俺が迷い込んだのは特殊なケース。
- ・神様である女の子は力が半減しているため、俺を送ることが出来ない。
- ・解決策は女の子の感情を取り戻すこと。

結論。

- ・……希望が、見えません。

さん

マンホールから落ちたらそこは異世界でした。帰るためには神様である女の子の感情を取り戻す必要があるらしいです。……ああ、誰か夢だと言ってくれないかなあ。もしくはドッキリ！ の札を出してくれてもいい。大丈夫、今なら絶対に怒らないから。泣いて喜ぶから。

何でも、昔感情が失われてしまった時に力も失くしてしまつたらしい。だから感情を取り戻せたらもしかしたら力も……という話らしく。なんだその無茶ぶり！ と思わず突っ込みそうになった。というか突っ込んだ。「なら素直に諦める」と返されてへこんだ。フクロウさん容赦なさすぎる。

そんな彼がわずかな可能性を希望として提示してくる辺り、本当に他の方法はないんだろう。けど、一人の女の子の感情を取り戻す

なんて、容易であるはずがない。きっと本来なら何度もカウンセリングとか受けて、少しずつ改善していくべき問題なんだから。それだけ複雑な事情を、平凡代表の俺にどうしろっていいのか。しかも「もしかしたら」という曖昧なオマケつきで。

「諦めればいい」 喋る鼻は、再度俺に言う。それが一番楽なのだと、どうしようもない事だとして受け入れてしまえばいいと。……でもそれが出来るなら、泣いたりしない。こんなふざけた話に縋ろうとしたりはしない。可能性がゼロじゃないなら、足掻いてみせようじゃないか。ただ純粹に、この女の子と話をしてみたかったのも、理由の内だったかもしれないけど。

「とりあえず、腹へった……」

よくよく考えてみれば、夕飯前にここに来てしまつてそれから歩き回ったんだから、そりやお腹もすくよな……。そういえばこつて食生活どうなつてんだろ。木の実とかはあつたけど、色がなくてちつとも美味しそうには見えなかつたんだよなあ。

あ、とふと思ひ出し、ずつと持つてた鞆を漁る。入ってるのは教科書とか、電子辞書とか、まあ一般的なもの。それなりに重いから置いてきてしまえばよかつたんだろうけど、俺は絶対に手放さなかつた。手放せなかつた。俺を証明する唯一のもののように感じたからでもこうなるつて知つてたらもつと色々持つてきたんだけどな。いや、分かつてたら来てないつていう突つ込みはなしの方向で。

ついでに、電子辞書の画面もやつぱり真つ暗だった。うーん、世界の違いのせいなんだろうか。ファンタジー。そんなことを考えながらしばらくしてお目当てのものを見つけ出し、手に取る。

「君……えーと、そういえば君たちの名前は？」

お菓子の袋をがさがさと開けつつ、気になったことを尋ねてみる。そう、今までのやり取りを思い起こしてみれば名乗つたのは俺だけだった。二人（正確には一柱と一匹）とも自己紹介をしてくれなかつたから歳はおるか名前さえわからない。だから教えて欲しい。そんな俺の発想は、別に間違つちやいないはずだ。

「……えつと、名前？」

なのに無言なのは、何でなんだろうなあ。俺つてひよつとして空気読めない……？

「ない」

落ち込んでたら、ようやく女の子が返事をくれた。

「ないさん？ 面白い名前だねー……って無いの!？」

名前ないって、今までなんて呼ばれてたんだろうか……。女の子はずっと淡々としてて、全くぶれない。ぶれなすぎてちょっと怖い。表情にも声にも温かみがないし、なんとか機能的だ。もしかしなくても常にこのテンションなんだろうか。

「主は主。わしはフクロウ。それだけだ」

「え、フクロウさんの名前フクロウなんだ……」

なんとという直球ストレート。せめてもうちょいどうにかしようよ。

「好きに呼べばいい」

「好きに呼べ、って言われても……うーん」

まさか、ないさんと呼ぶわけにもいくまい。となるとここは、あだ名とかつけるべきなんだろうか。いやそもそもあだ名つてのは本名からもじるものなんだから、ちゃんと名前決めてあげるべきなのかも。でも名前つけるなんてペット飼った時以来なんだけど……そういえば死者はここに来るって話だったから、あの子も来たのかな。子供ながらに一生懸命世話をした。そうしたら、愛情で返してくれた。優しさだけで包まれていた、あの頃。でもその命は儂くも消えてしまった。悲しくて悲しくて仕方がなかったのを今でもよく覚えている。

って今は名前だよな、名前。何か手がかりはないかと、俺はきよろきよろと辺りを見渡す。なんか、物がほとんどないんだなあ。タンストか、鏡とか、必要最低限ものしかないっぽい。何に使うのかよくわからないものとかも壁に立てかけてあったりするけど。テレビがないのは現代っ子には辛いです。あ。

「紫苑！」

「シオン……？」

「名前って、大切なものだと思うんだ。君の瞳が紫苑色だったから、紫苑。……だめかな」

そしてまた訪れる、沈黙。しまった、やっぱり安易すぎたんだろうか。結構いいと思ったんだけどなあ。後はえーと、董とか菖蒲とか……小さい頃妹に聞かされた知識を引きずり出す。何でか、出てくる名前は全部花の名前だった。

「かまわぬ」

「へ？」

それってかまわないうって意味？ つまりいいよ、ってことなんだろうか？

「主がそう言っておるのだ、何を聞き返す必要がある！」

「えっと、じゃあ、紫苑。お菓子食べる？」

そうだよ、本当はそれが聞きたかっただけなんだよ。袋をあけたスナック菓子を、二人の方に向ける。でもフクロウさんって人間のものを食べるんだろうか。

「……お菓子？」

「あ、もしかしてこういうの食べたことない？ これコンビニ限定の新品でさー。って別にそんなことはどうでもいいか。はい、お一つづつぞ」

彼女の白くて華奢な手に一つ、スナック菓子を乗せる。彼女は相変

わらず無表情のまま、でも興味深そうにじっと見つめていた。なんだ、普通の女の子じゃないか。(いやあんま普通ではないんだけど) さっきまでずっと緊張しっぱなしだったけど、ようやく力が抜けていく。

「ん、うまい。あー……癒される……」

正直ほとんど理解できてない、不思議な世界。それでも変わらない菓子の味に安堵しながら噛み締めるように食べた、そんな一日目。ついでに紫苑は、俺が食べたことで危険なものではない判断したのか、ぱくつと勢いよく口に放り込んで無言で噛んで無言で飲み込んでいた。……今回は無反応だったけど、まあこれから頑張ろうとおもう。

\*\*\*

そしてそれからほんの少しだけ、月日が流れて。

紫苑はあんま喋らなくて、大体はフクロウ(さん付けてたらいらな  
いって言われたから呼び捨て)から聞いた話だけど、なんとなくこの世界の仕組みについて分かってきた。本当になんとなく。

なんでもこの世界は「管理する者の想像世界」が基準なんだそうだよ。ようするに、紫苑の心の中がそのまま世界として形になつてるらしい。それを聞いて初めて、モノクロ調なのに納得した。後、りんごと思われるものが四角かったりさくらんぼらしきものの実が片方だけだったりしたのも納得。紫苑、色々と無知なんだもんなあ。……そんなんだから、味なんてほとんどない。腹が膨れるだけマシ、レベルだ。けど俺があげたスナック菓子が紫苑の記憶に残ったのか、ほのかにその味がする時もある。見た目りんごもどき、味は安いスナック菓子。カオスだけこの際文句は言えない。あー、ラーメン

食いたい、マツク行きたい、とにかく味が濃いもんが欲しい……。

「俺の勝ち、だね。えーっと、12勝4敗か」

ゲームが終わって山になっているトランプを集め、リズムよくシャッフルする。

紫苑もフクロウも、普段はこの神社ですっと過ごしてるんだそうだが何してるの？ と聞いたら何もしてない、って返ってきてびっくりしたものだった。そんなわけで特にするものもないので、トランプ、あやとり、花札、編み物……などを紫苑に説明して遊ぶことにした俺だった。一部変なのは妹に教わったやつだけど、まさかこんな場所で役に立つとは。

「紫苑、次は何がいい？」

「何でもいいぞ」

「うーん、何にするかな」

感情が失われているという彼女は笑うどころか一切表情を変えたりはしなくて、当初は怖いと思ったものだけど、今は大分慣れてきた。彼女に悪気はないわけだし。ポーカールとかダウトとか、そういう心理戦は全然考えが読めなくて完敗する羽目になったけど。

「でもその前に水、汲んでこようかな。喉渴いてきた」

「待て、わしも行く」

「おっけ。じゃあ紫苑、少し待ってて」

「うむ」

立ち上がり、やっぱり勝手に開くふすま（今更だけどどういう原理なんだろうか）を通して外へと出て行く。目指すのは歩いてちよつと行ったところにある小さな川。俺の前には案内役でもあるフクロ

ウ。あんなに驚いた喋るフクロウも、今ではすっかり慣れてしまった。慣れって怖い。

「あのさ、そういえば聞きたかったことがあるんだけど」

どろどろとした土を踏みしめながら、フクロウに話しかける。歩きやすいスニーカー履いててよかったよ、ホント。まさか森を歩き回るようになるとは。探検もしてみたけど、凶暴な生き物もいると聞いてその考えは即座に捨てた。安全なのはこの周辺だけらしい。改めてみると、俺って実は運よかったんだな……。だから俺も神社で生活してる。だって外、こわいし。

「なんだ、まだ何か聞き足りないのか」

「いや、全然足りないから……」

フクロウの声には間違いなく棘があった。いやまあ、質問攻めしてしまった自覚はあるけどさあ。

「一応聞いてやろう。言ってみる、人間」

「ありがと。でも俺、ちゃんと名乗ったはずなんだけどなあ……」

考えてみれば、フクロウにも紫苑にも名前を呼ばれた覚えがない。人間って……一個人として認識されてるのかも怪しい呼び方だ。そのうちに目的地に辿り着き、俺は使い古された桶で水を汲む。

綺麗なのかそうじゃないのか、イマイチはつきりしない水。けどこみなんてどこにも見つからない川は、色さえあればいつかテレビで見たような美しい光景なんだろうと思う。なんか変な生き物が泳いでたりするけどさ。それはスルーしておく。

「ね、フクロウ。俺がここにいるのって特殊なケースって言ってた

「じゃん」

「うむ」

「俺の前にもそんな風に迷い込んだ人っていたのかな、って」

ずっと疑問に思ってたことの一つだった。かなり特殊、とは言ってもなんか前にもあったみたいない方だったから、ほんの軽い気持ちで尋ねたつもりだったんだけど、何故かフクロウは黙り込んでしまった。

「……フクロウ？」

「いるぞ」

「そっか、やっぱいるんだ！ その子ってどうなった？」

「おぬしが必要はない」

「いや、結構あると思うんだけど！ って、ちょ、先に帰るなよ！」

な、なんだろ……ひよっとして俺、聞いちゃいけない話題にふれた？ また？ なんか不機嫌というより、切なさが紛れた声音だった気がするの俺の勘違いなんだろうか。

でもそっか、やっぱいるんだ。その子はどうなったんだろう。無事帰れたのか、それとも叶わなかったのか。フクロウが答えてくれなかったのは、もしか俺に気を遣って……？ ま、まさかな。

「紫苑、ただいまー。あれ、どうかした？」

いつもは部屋の中から出ない紫苑が、どうしてか外にいる。何をするでもなく、ぽつんと突っ立ってて。

不思議に思ってた彼女の視線の先を追う。……ああ、ここにも命の終わりって、あるんだ。

「他の動物に襲われたのかな。お墓、作ってあげようか」

「…………墓？」

「遺骸や遺骨を葬るところ…………って言っても難しいよな、俺は、亡くなってしまうた者へ居場所を作るためだと思ってるよ」

桶を置いて、息絶えてしまってる小鳥をそつと手のひらに乗せる。

…………つめたい。この子はいつからここにいたんだろう。紫苑やフクロウに出会ってなかったら、俺もこうなっていたのかもしれない。そう思うと、とても他人事には思えなかった。

「おぬしの言う事は、よく分からぬ」

「そつか。無理にとは言わないから、よかつたら手伝って欲しいな」

人の形をしているのは神のみで、フクロウが喋れるのは神の力を分け与えてもらってるから、らしい。言葉が通じるのは紫苑とフクロウだけ。人の形をしているのは紫苑と俺だけ。でも俺と紫苑は違う。フクロウはもっと違う。この子も、ちがう。皆それぞれひとりぼっちだ。

だからこそせめて、最期くらいは。

木の棒で十字架を作った簡素な墓に小鳥を埋めて、手を合わせる。ここで亡くなったら、どこへいくんだろう。それこそ無へと還っていくんだろうか。俺には想像もつかなかった。

「大分冷えてきたね。そろそろ中に入ろう、紫苑」

「…………胸が、」

「紫苑？」

ぽつり、と呟いた紫苑は、左胸を押さえて眉間に皺を寄せている。こんな姿を見るのは初めてだった。

「前にも、こんなことがあったのじゃ。胸にぽっかりと穴があいたような、そんなものが」

「それって、寂しいんじゃないかな」

「寂しい？」

「そう。寂しかったり、やりきれなかったり、死んでいうのは、悲しいものだから」

「これが、悲しい……」

この時の紫苑は、泣くのを必死に堪えている子供のようにも見えた。ひたすら彷徨い続けている、迷子の子供のように。

ここで亡くなったらどこへ行くのか、神である彼女に尋ねれば答えを得られたのかもしれない。けどその質問は相応しくない気がして、俺はどうしても聞けなかった。

「戻ろうか、紫苑」

いつまでも動こうとしない彼女に、手を差し伸べる。ゆっくりと時間をかけて、彼女は俺の手を取ってくれた。

つかみどころのない、色のない世界。それでも優しさとか切なさはこちらとあって、俺もこの世界で確かに生きてる。

この日を境に、少しずつ、少しずつ、世界に色がつくようになった。

よん

色彩が欠けた世界。

と言っても完全なモノクロというわけでもなくて、なんとというか全体的に彩度が低いだけ。モノクロではなくても、限りなくそれに近いそれぞれの色。紫苑の心が映し出されてるからだと聞いて、なるほど、と妙に納得したものだ。でも近頃……というか俺と紫苑がお墓を作った日から、少しずつ変化していつてる気がする。彩度が上がったたり、桜や彼岸花が咲いたり、動物たちの顔が穏やかになったり。これってかなり良い傾向だと思うわけだ！

「あれ、紫苑寝ちゃった」

遊び疲れてしまったのか、いつの間にか彼女は横になっていた。今は慣れたけど（慣れてっすごいと最近よく思う）、初めて彼女の眠る姿を見た時はびっくりした。だって本当に息をしてるのかこっちが焦ってしまつくらい静かに静かに眠るから。ちなみにフクロウはたまに寝言がうるさい。

「しっかし、紫苑って美人だよなあ……」

「襲つなよ」

「襲わないっての！ 俺をなんだと思ってるんだよ！」

とはいいつつ、俺は彼女の寝顔から視線を外せない。それもこれも、紫苑がとびつきり綺麗なせいだ。丁寧に切り揃えられた漆黒の髪、長い睫、すつと通った鼻筋、形の良い唇……人が望むものを全て兼ね備えてる気がするのほきつと気のせいなんかじゃない。極めつけは、儚ささえ感じてしまつほど雪のように真っ白な肌。ふと人間離

れした神秘的な美しさがこわくなって、彼女の頬にそつと手をあてる。……あたたかい。

「よいゆめを、紫苑」

彼女が風邪を引かないように、ふわりと毛布をかける。彼女の夢の中にはどんな世界が広がっているんだろうか。彼女にとって幸せな夢であればいい。

「でも俺は眠くないんだよなあ……。フクロウ、話し相手になつてくれる？」

「知らん」

紫苑を見守るようにずっと隣にいたフクロウだったけど、近くにいては彼女を起こしてしまうと考えたのか、俺の傍に移動してきた。うん、これは「いいよ」ってことだ。なんだかんだで、話しかけたらちゃんと答えてくれる辺りいい奴。いや、いいフクロウ？

「そういえばさ、紫苑の口調ってフクロウのが移ったもの？」

紫苑はあまり口数が多くなかったけど、時々話す言葉はなんというか、随分と古典的だった。「じゃ」とか、リアルに聞くの初めてだったし。一人称がわらわだったのも驚いたなあ……。フクロウにもそんなところがあるから、もしかして、と思つて質問してみる。ただ単に暇だったからで、特にこれといって他意はなかった、はずなんだけど。

「……結果的には、そうなるのかもしれないな」

「そっかー。ずっと二人でいたら移るよなあ」

「二人では、なかったのだ」

「へ？」

今、フクロウはなんて言った？ 二人じゃなかった、って……他に  
も誰かいたのかな。紫苑と、フクロウ以外の誰かが。でもそう考え  
てみても、全くイメージが湧いてこなかった。だって紫苑もフクロ  
ウも、今まで一度もそんな素振りを見せたことがない。二人だけの  
世界というか、そんな感じだったからだ。俺がそんな風に考え込ん  
でると、フクロウも同じような顔をしていたのに気付いた。なんで？

「改めて、おぬしに問うが」

フクロウは真つ直ぐに俺を見て、真剣な声で問いかけてくる。な、  
なんだろうこの緊張感。今から先生に怒られます、みたいな空気だ。  
……つまり、めちやくちゃ逃げ出したい。

「な、なにフクロウ」

しまった、おもいつきり声裏返った。そんな俺を気にかけること  
もなく、フクロウは続ける。

「おぬしは、自分のいた世界に帰りたいのか」

「何をいきなり……。そりゃもちろん帰りたいよ、当たり前だろ」

「主の感情が戻ってきているのは、実に喜ばしい。だが、わしには  
それは崩壊の合図のような気がしてならんだ」

彼は何を、言っているのだろう。その言い方はまるで、俺を責めて  
いるかのようだ。いや実際、そうなんだろう。何で！

「で、でも俺に紫苑の感情を取り戻させて言ったのはフクロウだ。  
そうするしか帰る術がないっていったのも……！」

「ああ、確かに言った。事実、それ以外に方法はない。だが」

手が、震える。嫌な汗が、背中に伝う。頼む、頼むから。それ以上はもうやめてくれ。聞きたくない、聞いちゃいけない。俺はまだ、知りたくない！

「おぬしは、この世界を壊す者だ」

無情にも、フクロウは止めてくれなかった。突き放すような一言が俺の頭の中でリフレインして、やがて視界から色を奪っていく。紫苑の心の中が鮮やかになっていくことが、嬉しかったし楽しかった。三人で話したり遊んだりするのがいつからか自然になっていて、ほんの少しだけ、このままでもいいかな、なんて思ったりもした。でも単純に喜んでた自分の浅はかさを、ここで知る。

「……なん、だよ、それ……！！」

いつまで経っても俺は「間違ったもの」で、紫苑とフクロウは「正しいもの」。どうやっても、同じ場所には立てない。どれほど願っても、俺は認めてもらえない。俺は、俺は……！！

「大声を出すな。主が起きる」

「……っそもそも俺だって、好きでこんな世界に来たわけじゃない！！」

感情に任せて叫んでしまった後、小さな物音が、俺の耳に届く。さあっと血の気が引いていくのを感じながら、ゆっくりと振り返った。

「紫苑……」

彼女の紫の瞳は、俺を映したまま大きく揺れている。俺今、何を言  
った……？ とんでもなくひどいことを、いわなかったか。

「紫苑、ごめん、俺……いま」

「……すまぬ」

彼女は弱々しい声で謝ると、固まったままの俺の横を通りすぎて外  
へと出て行く。あ、と漏らしたときには、既に姿がなかった。……  
当たり前だ、彼女の作り出した世界を俺は否定したも同然なんだか  
ら。神である彼女の力が足りないから俺は帰れないのだから。でも  
それは、いくら事実でも口にしちゃいけないかったものだ。

紫苑だって全く罪悪感がなかったわけじゃない。そんなこと、彼女  
と過ごしているうちに気付いた。ただ彼女はそれを上手く形に出来  
なくて、方法すらも分からなかっただけ。なのに俺は、無遠慮に彼  
女を傷つけた。やっと戻りかけていた繊細な心を、粉々に砕いたん  
だ……！

「紫苑……っ」

彼女に、謝らなくちゃいけない。あの子は決して人形なんかじゃな  
い！

「待て」

「待てって、どうして！」

彼女を追いかけようと一歩踏み出した俺を、フクロウが止める。あ  
あもう、空気読んでくれ！ つーかそもそもその原因はお前だから！

「何も知らぬおぬしが行ったところで、恐らく意味はない。おぬし  
は、きちんと知るべきなのだ」

「なん、だよ。教えてくれなかったのはそっちじゃんか」

当てつけめいた言い方になってしまったのは、自覚してる。ほとんど八つ当たりにも近い。でも仕方ないじゃないか、何もかも受け止められるほど俺は人間出来ちゃいない。どこにでもいる、普通の子供だったんだから。

「そうだな、おぬしに黙っていたのはこちらの方だ。だからこそ、包み隠さず話そう。主の感情が失われてしまったのは、主の前の神が亡くなった時だ」

「前……？ 亡くなる……？ なんだそれ、神は代替わりする、ってこと？」

フクロウは何も答えなかった。無言の肯定と取っていいんだろう。じゃあ、さっき話してた「もう一人の誰か」は前の神様、ってことか。その人がいなくなってしまうたから、紫苑の感情は失われた。そう考えると、引っかけかかっていた何かが消されていく気がする。本当は、こんな風に立ち止まっている場合じゃないのに。彼女を追いかけないといけないのに。それなのに俺は、「知りたい」と、強く感じてしまっていた。

「以前、おぬしは問いかけたな。自分と同じ境遇の者がいたのか、と。答えをやるう。彼女は、今もまだここにいる」

「え、でもこの世界で人の形をしているのは………っ!？」

「主の力は半減している。そのせいで境界線が脆くなっていると見ていい。紫苑に、この世界は重過ぎるのだ」

あちこちに散らばっていた幾つものパーツが、一つ一つ確実に同じ場所に集まっていく。俺はようやく、自分の身に起きたことを本当の意味で理解できた気がした。

俺と紫苑は、最初から一緒だったんだ。違いなんか何も無い、勝手に絶望してたのは俺の方。ひどい言葉を投げかけたのも、俺だ。知らなかったから、は免罪符にはならない。マジで何やってるんだよ、俺……

「この世界は主が作り出す世界。主がおぬしに会いたいと望むのなら、おぬしは彼女の元に辿り着けるだろう」

「でもフクロウは、紫苑が大事なんだよな。だから、俺を遠ざけようとしてた。もし本当に崩壊してしまったら……」

「たわけ。大事だからこそ、やはりわしは主にあんな顔はしてほしくない」

「フクロウ……」

彼の心は、本物だ。俺と、人間と、何も変わりはない。

「前の主が居た時のように、ただ笑って欲しいのだ。今それを叶えられるのは、おぬしだけなのだろう。智也」

そんなことを言われても、正直俺に何が出来るのかなんてわからなかった。でも紫苑を傷つけてしまったのは俺で、無知だったのも俺なんだ。なら、謝らないといけない。

許してくれるかはわからないけど、きみに、会いに行くよ。

「ありがとう、フクロウ！」

それと、八つ当たりしてごめん！ そう言い残して、俺は駆け出す。そんな俺を、フクロウが優しく見守っていてくれてる気がした。

\*\*\*

「辿り着けるだろう、ってフクロウは言ってたけど……紫苑どこいった……！」

これってもしかして、紫苑は俺に来てほしくないってことなんだろうか。うわ、そう考えると結構てかかなりへこむんだけど……。けどそれでも、諦めるわけにはいかない。

彼女の姿を探して、俺は森を走り回る。きっと遠くまでは行っていないはず。近くにいないはずなんだ。なのにどこへ行ったんだ、紫苑！

「あ、れ？」

心の中で彼女の名前を呼んだ瞬間、目の前の景色がまるでドミノ倒しのように勢いよく変わっていく。灰色から、紫へ。木々から花へ。突然の現象に俺は戸惑いながらも、ゆっくりと先へ進む。

「これ、全部同じ花……？」

辺り一面を埋め尽くした花には、どこか見覚えがあった。ずっと前、植物図鑑で見たことがある。

名前はアスター。これはギリシャ語で星を意味する単語。花言葉は「君を忘れない」和名は、そう……

「紫苑……！」

淡い紫色が、彼女の瞳の色とよく似ていたから。だから彼女にその名前をあげた。刹那、花がしおれていく。ねえ紫苑、これが今の君の心なんだろうか。

「紫苑っ……！」

自分が今出せる精一杯の声で、彼女の名を呼ぶ。すると花は瞬時に消えていき、先にいた一人の女の子が姿を現す。女の子は、花を一輪胸に抱えていた。

「あの人を失ったとき、胸にぽっかりと穴があいたような気持ちになつたのじゃ。あれが、全ての色がなくなった日だった」

「紫苑……」

彼女は俺に気付いてるはずだけど、でも俺の方は見ない。ぽつりぽつりと、まるで独り言のように零していく。

「わらわは長く彷徨ってしまつてな、あの人と出会つた時にはもう帰ろうとも思わなかつた。そんなわらわを、あの方は快く迎え入れてくれたんじゃ。フクロウとわらわと三人で、あの場所で過ごした」

彼女の表情に変化はなかつたけど、ほんの少し、哀愁が紛れているように感じた。俺はその人を知らないけど、きつと良い人だつたんだらうなとは分かる。だつて紫苑に慕われてたんだから。

「でも、早く気付けばよかつたんじゃ。わらわがこの世界に来てしまつたのはあの子の力が弱まつてしまつていたからなのじゃと」

「たいせつな、人だつたんだね」

「あの人を想う気持ちをそうだというのなら、そうなんだと思う」

彼女の口調がばらばらになってきていたのは、彼女本来の口調が混じっていたからなのかもしれない。きつと彼女も俺と同じで、どこにでもいる女の子だつたんだ。

「すまぬ。わらわの力が未熟なばかりに……今のわらわではおぬし

を帰すことすら出来ぬ。すまぬな」

「俺こそ、さつきはごめん……」

「かまわぬ。全ては、わらわのせいなのだから」

「そう、じゃなくてっ！俺、ここに来て楽しかったんだ！」

「……え？」

きよとん、と目を丸くする彼女に、俺は笑みを作る。気を抜くとセキを切ったように喋ってしまいそうなのを必死に抑えて、一個ずつ自分の中で整理しながら彼女に話した。

「俺さ、流されるようになってなんとなく生きてて。でもそれって多分、未知の世界を避けてただけなんだ。だからここに来てしまった時、ひたすらに怖かった。目を背けてたものがすぐそこにあるんだから」

「それはわらわが……」

「正直、俺は今でも帰りたいと願ってる。やり残したことが沢山あるんだって、気付けたんだ」

「……奪ってしまったって、ごめん」

「そうじゃないよ。俺、ここに来なかつたら日常に疑いすら持たなかった。当たり前なものなんて、あるはずないのにね。教えてくれたのは、紫苑とフクロウだよ。ここへ来て二人に出会えたこと、心からよかったと思うてる」

嘘偽りない、俺の想いだった。彼女に伝わるだろうか、彼女は信じられるだろうか。

「どう、して……！何もかもわらわのせいじゃー！」

「俺さ、思うんだ。それはきっと、君が自分以外の誰かを求めてたからなんだよ」

だって、一人は寂しい。フクロウは彼女から離れなかつただろうけ

ど、それだけじゃ埋められない心の隙間だつてあつたはずだ。世界の管理者だとか、神だとか、そんな肩書きの前に彼女は一人の人間なんだから。

孤独をおそれた、ひとりぼっちの女の子。

「俺を選んでくれて、ありがとう。紫苑」

君に会えて、よかった。一人なんかじゃないと、どうかそれだけは知っていて。

「……っ大馬鹿ものじゃ！ おぬしは大馬鹿ものじゃ！」

「せ、せめて馬鹿にしといてくれないかな……。その涙は、うれし泣き？」

「知らぬっ！ おぬしなど大馬鹿もので良いんじゃ！」

「ああもう、こすつたらだめだつて」

柔らかな花の香りが、俺たちを包み込む。花はもう枯れない。

・  
・  
・  
「……あれ？」

瞳をあけたら、さつきまでと違う場所にいた。そこまで汚くはないけど、まさに男の部屋といった感じの乱雑ぶりは、間違いなく俺の部屋だ。今度掃除しよう……。ってそうじゃなくて。

帰って、これなんだ。

「あら、トモ起きたの？ もう、帰ってくるなり寝ちゃうんだもの。晩御飯できてるから、着替えたら来なさい」

きつと俺を起こしに来たんだろう。俺にしてみれば随分久しぶりに見る母さんの顔は、優しさで溢れてた。懐かしさで、胸がいっぱいになる。

「あの、母さん。いつもありがとう」

「なあに、急に？ おかしな子ねえ」

「なんでもない！ すぐに行くよ」

母さんは首を傾げながら、「温めておくわね」とキッチンに向かっていく。俺はほっと息を吐き出して、ポケットから携帯を取り出す。日付を確認するためだ。

裏の世界は、表とは時間の流れが異なるらしい。それを聞いたとき俺はすごく心配したもののけど、戻る時に流れは正されるはずだって言ってた。その言葉の通り、携帯が示す日付は俺がマンホールに落ちた日と一緒だった。帰ってきてすぐ寝た、って母さんが言ってたし、少しだけ時間が経ってるようだけど、まあ誤差の範囲だろう。ああ、よかった……！

まるで夢のような、あの世界での出来事。もしや本当に俺が見てた夢なんだろうか、と一抹の不安が胸に過ぎった時、俺の左手に巻かれたミサンガが視界に入った。俺が作り方を教えて紫苑が作った、ミサンガ。あの世界とこの世界を繋ぐもの。そつと撫でれば、二人がこたえてくれた気がした。

「紫苑とフクロウ、どうか元気で」

\*\*\*

俺的にはあの世界の思い出を忘れないように日々を生きようと、ま

あそんな風に格好いいことを考えてたわけなんだけど。

「あー、また負けた！」

「わらわの勝ちじゃな。これでお菓子ゲットじゃ」

「これけっこー高かったのに……。よし、もっかい！」

結局俺は、またこの世界にいる。

フクロウいわく、「主がおぬしが来るのを望むようになった」らしくて、そのせいか俺は扉を開きやすくなってしまったらしい。前みたいにマンホールから落ちたり、玄関を出たら景色が変わってたり、方法は様々だ。でも今の紫苑は俺を帰せるし、特に気にする必要もなくなったのでしょっちゅう行き来するようになった。まあ、こういうのもアリだよな。きつと。

「ってああ、フクロウにもあげてるし！俺まだ食べてないのに！」

「ふん、知らんな」

「騒ぐな、智也。おぬしにもやるぞ」

「ありがと、紫苑。ん、うまい！」

めぐるめぐる、二つの世界のお話。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2502z/>

---

Aster

2011年12月11日20時56分発行